しっかり者と自由奔放

相も変わらず、給食時間にはバイオリンを奏でたりしています。

子どもたちのお気に入りは、たいていジブリの曲です。

「先生、あの曲もう一回弾いて」とリクエストが入ることも少なくありません。

久石譲の曲作りにその度に感嘆するとともに、弾きながら自分自身の心もどこか癒されていく感じがします。

そういえば、自分が親になってから印象が一変した作品があります。

「となりのトトロ」です。

子どもの頃に見た時はシンプルに「面白い作品だなぁ」だったのが、親になってからふと見た時にエンディングで号泣してしまったことがありました。（単純に年を取って涙もろくなっただけかもしれませんが笑）

さて、この「となりのトトロ」には「元々存在しなかったシーン」があるんですが、皆さんご存じでしょうか。

宮崎駿監督が最初に書いたシナリオには存在せず、後から書き加えられたシーンがあるのです。

「となりのトトロ」には、サツキとメイという姉妹が登場します。

ちなみに我が家の上２人の娘の関係は、この２人の関係とソックリです。

しっかり者の姉と奔放な妹。

両者のコントラストがクッキリと現れています。

こういうケースではたいてい、しっかり者の姉は褒められることも多ければ、求められることも多くなりがちなもの。

これも、我が家では似たような状況がよく生まれています。

特に、家族ではない外部の方との関わりの時にそのことが表面化すること

が多いです。
　以前も、我が家に泊まりに来たご夫妻が、終始しっかり者の姉の姿を褒めて下さっていた一幕がありました。
　そして、「お姉ちゃんはしっかり者で素晴らしいですね」と褒めて下さるのです。
　私は、こうした時に、決まってする話があります。
　それは、となりのトトロのお姉ちゃんサツキが号泣するシーンのことです。
　実は、このシーンこそが当初のシナリオになかったのです。
　しかし、宮崎駿監督の相棒（鈴木敏夫さん）のアドバイスによって、シナリオに変更が加えられました。
　理由は、「このまま成長したら、サツキが不良になってしまう」から。
　どれだけしっかり者でも子どもは子どもです。
　ちゃんと感情を吐露できる場も作ってあげたいと思っていますし、その役割の中心は家庭にあるとも思っています。
　「しっかり者」として、褒められたり求められたりすることが多い子ほど、感情の逃がしどころを意図的に作ってあげたいものです。
　学校でも、家庭とは違う「外」の世界だからこそ、結構気を張って過ごしている子は少なくありません。
　以前も書いた「分人主義」よろしく、家での様子と学校での様子がまるで違う子もたくさん見受けられます。
　それこそ、個人懇談等でお家の方と話した時に、双方が驚いたりするような状況も生まれるほどです。
　そして、学校ではいわゆる「優等生」と見られがちな子や「思いやり深い」姿が随所に現れている子ほど、私は家庭でちゃんと緩めているかなということを気にしたりします。
　それこそ、先ほどのサツキの例のように、です。
　ですから、お家の方と話した時に、
　「家ではものすごく甘えん坊です」
　「全然いうことを聞かないので学校での様子を聞いてびっくりします」
　「少しでも学校みたいにきちんとしてくれたらいいですけど」
　のような話を聞くと、少し安心したりもするのです。
　どれだけしっかり者でも、まだまだ小学生。
　感情を吐露したり、それを受け止めてもらえたり、そんな安心・安全基地があることは健やかな成長には欠かせないものだと思っています。

以下に、鈴木プロデューサーの本から抜粋して紹介します。

1学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ (google.com)

子どもというのは、やろうとするがなかなかできず、失敗ばかりしてしまう。それが子どもらしさでしょう？完璧にやってのけるサツキちゃんという子に対して、強い違和感を持った。そのことを宮さんに言いました。「こんな子がほんとにいるわけがないじゃないですか」。そのとき、ぼくも若かったからですけど、さらにこう言った。「こんなことを子どものうちから全部やってたら、サツキは大きくなったときに不良になりますよ」。

このとき、宮さんは本気で怒りましたねえ。「いや、こういう子はいる。いや、いた」。何を言うのかと思ったら、「おれがそうだった」。宮さんは男兄弟ですけど、お母さんがずっと病気で、彼がみんなのご飯を作ったりとか、お母さんの代わりをやっていた。そういう思いがあったので、彼はお母さん以上に立派という、理想化したサツキを作り出したわけです。

そのときは怒りましたけど、宮さんはこれを覚えていた。もともと、他人の指摘は真摯に受け止めてくれる人なんです。あるときにぼくを呼んだ。「ちょっと来てくれ」。何かと思ったら、お母さんが死ぬんじゃないかと心配してサツキが泣くシーンがあるでしょう、そこのシーンの絵コンテができて、「鈴木さん、見て」と言うんです。「お、ここで泣くんですね」と言ったら、「泣かせた」と言うんですよ。そして「鈴木さん、これでサツキは不良にならないよね」。ぼくが「なりません」と言うと、宮さんは「よかった」と喜ぶ。いい大人なのにもう子どもみたいですよ。純粋な人なんだとあらためて思いました。